

三重県伊賀市の組紐業における 産地構造の変化

富山大学人文学部人文学科社会文化コース人文地理学研究室
11410028 大路 航平

1. 問題の所在

近年地場産業の衰退、縮小傾向が指摘されている。



地場産業研究の下火と研究数の減少



近年の急速な環境変化の影響は地場産業産地にも当然及んでると予測されるために地場産業産地を取り巻く環境の変化が地場産業の産地構造にどのような影響を与えているか、地場産業産地がこれまで維持されてきた要因、これから維持されていくための要因について分析する必要がある。

2. 既存研究

立川（1997）や高柳（2003）など従来の地理学における地場産業研究は産業論的アプローチと呼ばれる手法にあった。

産業論的アプローチは景気の変動や製品、製法の変化によって産地の構造がどのように変化したかを捉えることに主眼を置いている。

→具体的には産地における分業構造、生産流通構造全体の変化、企業の空間的配置の変化を分析する。

2. 既存研究

◦山崎（1977）などは地場産業産地をいくつかに分類し、類型別に分析する手法を用いた。ex)「伝統型」と「現代型」

伝統型・伝統工芸品やそれに類するものを産出している産地
歴史性、伝統性に基づく手工的生産で産地の高付加価値化を図り、産地を維持している。

伝統-転換型・高度経済成長期以降に製品、製法を一部変換した産地。高付加価値化が難しく、生産流通構造を大きく変化させていることが多い。研究の蓄積が少ない。

3. 研究目的と方法

伊賀組紐・高度経済成長期以降に機械による生産が増加した伝統工芸品。「伝統-転換型」の産地。

研究目的

近年の環境変化による生産流通構造の変化を産業論的アプローチで捉え、分析することで伊賀組紐産地の産地維持要因を明らかにすること。

3. 研究目的と方法

初沢（2006）は産地の人材養成システムは製品の特性や生産構造と深く結びついているために労働力の再生産に注目する必要があると主張している。

本研究では

- ①生産過程、流通過程における近年の変化を聞き取り、産地構造の変化を分析する。
- ②ライフヒストリーから後継者への技術継承について分析する。

4. 分業構造と内職制度

工程	用いる道具	組紐店
1 染色	染色機	自工場
2 精練	麻袋、釜	自工場
3 仕様書づくり	用紙、筆記用具、ソロバン、色糸、色見本台紙	自工場
4 糸割り	秤、棒台	自工場
5 染色	水槽、織、洗濯機	外注（市内の染色業者）
6 乾燥	竿（天日乾燥）、乾燥機	外注（市内の糸繰り業者）
7 糸繰り、経尺	手動糸繰機、電動糸繰機、小枠	外注（市内の糸繰り業者）
8 合糸	産繰機、ハサミ、大枠	外注（市内の糸繰り業者）
9 撚りかけ	手動撚りかけ機、動力撚機	外注（市内の糸繰り業者）
10 たぐり	たぐり台	外注（市内の糸繰り業者）
11 切斷	分棒、ハサミ	外注（市内の糸繰り業者）
12 つぼ組み	つぼ組台、つぼ組用台	外注（市内の糸繰り業者）
13 組み作業	高台、重打台、角台、綾竹台、丸台、内記台	自工場、内職
14 厚付け	厚付け台、物差し、針、ハサミ	自工場、内職
15 節取り	毛抜き、ハサミ	自工場
16 毛抜き	ガスバーナー	自工場
17 コロ掛け	コロ台、ローラー	自工場
18 化整糸かけ	棒台、ハサミ	自工場
19 湯のし	湯のし釜、木桶	自工場
20 厚巻き	セロハン、糊	自工場
21 厚切り	ハサミ	自工場
22 後品箱入れ	糊箱、紙箱	自工場

（上野市史より作成）

5. 伊賀組紐産地における近年の環境変化

年号	出来事
1902年	初代廣澤徳三郎が上野上林に工房を開業
1939年	三重県繊維雑品工業組合の設立
1942年	伊賀組紐の業者が8小組合を結成
1949年	三重県組紐協同組合の結成
1954年	伊賀における機械組みの導入
1970年頃	韓国製組紐の出現
1975年頃	着物離れの影響が見られるようになる
1976年	伊賀組紐が伝統工芸品として指定される
1978年	伊賀組紐センターの設立
1980年	中国製組紐の国内参入

（「50年のあゆみ組匠」より作成）

5. 伊賀組紐産地における近年の環境変化

本研究では近年の環境変化の中から

- ①着物離れと海外製品の流入による供給過剰
- ②伝統工芸品の指定

が伊賀組紐の産地構造にどのような影響を与えたかに注目する。

また三重県組紐協同組合、組合が運営する伊賀組紐センターが伊賀組紐の産地において果たしている役割についても注目する。

6. 調査内容

本研究では三重県組紐協同組合と伊賀市内で組紐店を営む3人の事業者に関わり調査を実施した。

調査対象者は従来の帯締め等の商品とは別に新商品を早くから開発し、販売している事業者（A）糸繰りを近年自工場で行い始めた事業者（B）伊賀組紐の産地において伝統工芸士に認定された事業者（C）を選定した。

3人の事業者を選定した要因はそれぞれ生産流通面についての環境変化、分業制度の変化、伝統工芸品の指定が産地に与えた影響について考察するのに適していると考えられたからである。

7. 聞き取り内容

聞き取り内容は

- ①組紐店を経営するに至るまでの経緯
- ②内職、従業員の内職、近年の動向
- ③生産流通面に関する近年の変化
- ④分業先の染色業者と糸繰り業者の近年の動向
- ⑤後継者の有無や技術継承についてである。

8. 調査結果

工程	用いる道具	A	B	C
染色	染色機	自工場	自工場（週に一度）	自工場
精練	麻袋、釜	自工場	自工場（週に一度）	自工場
仕様書づくり	用紙、筆記用具、ソロバン、色糸、色見本台紙	自工場	自工場（週に一度）	自工場
糸割り	秤、棒台	自工場	自工場（週に一度）	自工場
染色	水槽、織、洗濯機	自工場、外注	自工場、外注	自工場、外注
乾燥	竿（天日乾燥）、乾燥機	自工場、外注	自工場、外注	自工場、外注
糸繰り、経尺	手動糸繰機、電動糸繰機、小枠	外注	自工場	外注
合糸	産繰機、ハサミ、大枠	外注	自工場	外注
撚りかけ	手動撚りかけ機、動力撚機	外注	自工場	外注
たぐり	たぐり台	外注	自工場	外注
切斷	分棒、ハサミ	外注	自工場	外注
つぼ組み	つぼ組台、つぼ組用台	外注	自工場	外注
組み作業	高台、重打台、角台、綾竹台、丸台、内記台	自工場	内職	内職
厚付け	厚付け台、物差し、針、ハサミ	自工場	内職（納彩前のみ）	内職
節取り	毛抜き、ハサミ	自工場	自工場（納彩前のみ）	自工場
毛抜き	ガスバーナー	自工場	自工場（納彩前のみ）	自工場
コロ掛け	コロ台、ローラー	自工場	自工場（納彩前のみ）	自工場
化整糸かけ	棒台、ハサミ	自工場	自工場（納彩前のみ）	自工場
湯のし	湯のし釜、木桶	自工場	自工場（納彩前のみ）	自工場
厚巻き	セロハン、糊	自工場	自工場（納彩前のみ）	自工場
厚切り	ハサミ	自工場	自工場（納彩前のみ）	自工場
後品箱入れ	糊箱、紙箱	自工場	自工場（納彩前のみ）	自工場

（上野市史と聞き取り調査より作成）

8. 調査結果

3人の事業者への聞き取り調査をした結果、3つの組紐店に共通することは

- ①和装需要の低下と海外製品の流入により、組紐業者の工賃は低下し、新規の事業者、内職はほとんどいない。
→内職や従業員が減少し高齢化した。
- ②市内の染色業者と糸繰り業者が激減し、3つの組紐店では今まで外注していた作業の一部を自工場で行い始めた。
- ①と②→手組みによる組紐の生産効率の低下

8. 調査結果

Bは4年前に市内に糸繰り業者がいなくなったことから他の業者に頼まれ糸繰りを始めた。現在は自工場での作業の大半が糸繰りに充てられている。

- 業者との分業から組紐店同士の分業へ
産地内での結びつきの強化

AやCは従来の帯締め以外にもネクタイやバック、アクセサリ、芸術作品としての組紐などの新商品を開発、さらに組紐の製作体験などを行うなど新規需要の開拓を進めている。

- 機械の導入後も手組みによる生産が価値を失わなかったことで手工的生産に伝統性が付与され、高付加価値化に成功した。

9. 考察

- ①1954年の伊賀における機械組みの導入
- ↓
- 産地内での手組みによる生産の重要性は低下せず（伝統の存続）
- ↓
- 高付加価値化に成功したことによる需要開拓
- ↓
- 手組みと機械組みの棲み分け
- ②和装需要の低下、海外製品の流入
- ↓
- 生産流通構造の変化
- ↓
- 手組みによる組紐の生産効率の低下



9. 考察

産地維持要因

- ①手組みによる組紐が機械組みによる組紐と産地内で共存しており、伝統工芸品に指定後は高付加価値化に成功し、新たな需要を開拓したこと（機械組みと合わせて様々なニーズに対応できる）
 - ②手組みによる組紐の生産効率低下のために機械組みによる組紐との両立が産地の維持には必要になっている。
- 今後は…
- ③後継者、新規就業者の獲得
産業としての組紐業の発展が必要（工賃の増加）
組紐のさらなる需要の開拓
 - ④手組みの生産効率の低下を抑えるためにも分業制の維持もまた重要
組紐業者同士の結びつきの強化→三重県組紐協同組合

9. 考察

伊賀組紐産地では他の「伝統-転換型」の産地と違い機械組の導入の後も手工的生産の重要性が失われず、今日の高付加価値化に成功しているため「伝統型」としての側面を一部残していた。

二つの製法の棲み分けがなされ、産地内で共存していたこのような事例は「伝統-転換型」の産地としては珍しく、このような産地がどのように変化しつつあるのか、産地を維持している要因は何かを考察することには一定の意義があったと考えられる。

参考文献

- 阿部和俊・山崎博 2004 「変貌する日本のすがた—地域構造と地域政策」古今書院
- 井出雅夫 1999 東洋工業の産地形成—福岡県大川地域を中心として— 地域環境研究（立正大）1：81-90
- 上野和彦・立川和平 2003 大島織物産地の構造とその二重性 東京学芸大学紀要 第3部門55 39-47
- 上野和彦 政経科学研究所編 2008 「伝統産業産地の行方—伝統的工芸品の現在と未来—」東京学芸大学出版会
- 上野和彦 2010 地場産業研究の課題 学芸地理65：3-10
- 上野市 2001 「上野市史 民俗編上巻」
- 高柳茂彦 2003 景気低迷期における地場産業の産地構造—秋田県角館における櫛組産地の事例— 農村研究97 43-54
- 竹内淳彦 2006 「環境変化と工業地域（改訂版）」原書房
- 立川和平1997 福井合織物産地の構造変化 経済地理学年報 43 18-36
- 塚本博平2012 1990年代以降の地理学における地場産業研究—瀬戸内地域を中心として— 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要34
- 塚本博平2013 地場産業産地の構造変化に関する地理学的研究—瀬戸内地域を中心として— 岡山大学大学院社会文化科学研究科修士論文
- 初沢敏生 2006 両組産地の特性と人材養成—岡山県備前産地と笠岡両組産地を例に— 経済地理学年報51（4）：340-367
- 三重県組紐協同組合 2000 「50年のおひも組紐」
- 三重県工業振興課 1975 「伊賀組紐産地診断報告書」
- 山崎充 1977 「日本の地場産業」ダイヤモンド社
- 山本茂興 1970 「伊賀のくみも」伊賀くみもセンター
- 滝沢規子 2009 「在来産業と家族の地域史—ライフヒストリーから見た小規模家族経営と結婚生産—」古今書院
- 経済産業省ホームページhttp://www.meti.go.jp/statistics/tyo/kougyo/H22kougyo/H29kougyo.html（最終閲覧日2018年1月9日）
- 伝統工芸山スエアホームページ http://kougehin.jp/
- 三重県組紐協同組合組紐の里ホームページ http://www.kumihimo.or.jp/index.html